



The Japan Association for Language Education and Technology

外国語教育メディア学会

NEWSLETTER No. 101

March 2023

発行 外国語教育メディア学会 (LET) (会長：森田 彰)

事務局 〒310-8585 水戸市見和1-430-1
常磐大学人間科学部 千葉敦研究室内

HP <http://www.j-let.org/>

巻頭言

新たな phase に向かって

会長 森田 彰 (早稲田大学)

2022 年は、この地上に暮らすほとんどの人々にとって *annus horribilis* として振り返えられる年でした。誠に残念でなりません。コロナ禍は止むことなく、また欧州でも烽火が絶えることはありませんでした。その中では比較的平穏に見える日本においても、様々な問題と課題が露呈し続けた年でもありました。災禍に遭われた皆様に、心よりのお見舞いを申し上げるとともに、共感と連帯を強めて行きたいと思いません。

さて、そうした中ではありましたが、私たちの学会活動は、会員の皆さんのご努力により、多くの事がなされた、と感じています。特に、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴う多種多様な制約を乗り越え、新たな学びに関する知見とこれまで積み重ねられて来た成果を融合する試みが、多くなされました。昨夏の第 61 回全国研究大会のテーマ「外国語教育の周辺技術と今後の可能性」は、まさにそうした LET の研究力を示す場となったと思っています。改めて、実行委員会の皆様に感謝いたします。来る第 62 回全国研究大会は、久々に対面での開催が予定されています。奮ってご参加ください。

既に *quarter* が過ぎようとしている 2023 年は、2022 年とは違う、*annus mirabilis* としなければなりません。新型コロナウイルス感染症への対応見直しによる学習・教授・研究環境の変化は確実にやって来ます。その中で、LET の学会活動も新たな *phase* に入ることとなります。それは、様々な苦難、困難の中から学び、力を得て、更なる進化と深化を教育の場にもたらす第一段階となります。LET は、社会の変化の有様を正しく分析し、テクノロジーを活用することによって、外国語教育を通じて社会をより良い方向に導く研究と実践を行って来ました。その LET の新たな年度が始まろうとしています。

私たち本部執行部も、会員の皆さんが存分に力を発揮できるよう、各支部執行部とともに、皆さんの教育・研究のお助けとなるよう、努めて参ります。来年度も宜しく願いいたします。

目次

巻頭言	1
全国研究大会を終えて	2
第 61 回 (2022 年度) 全国研究大会報告	4
2021 年度本部事業報告・決算報告	16
2022 年度本部事業計画・予算	28

全国研究大会を終えて

大会実行委員長 菅井 康祐（近畿大学）

2022年8月9日から11日の3日間にわたり、外国語教育メディア学会（LET）第61回全国研究大会（LET61）を開催いたしました。まずは299名の参加者の皆様、賛助会員の皆様、ご登壇者の先生方に心より御礼申し上げます。また、大会の準備においてさまざまな場面でご助言・お手伝いいただいた本部事務局、九州・沖縄支部の先生方に心より御礼申し上げます。

2021年のLET60に続き、今回もオンラインでの開催となりました。九州・沖縄支部がご担当されたLET60「外国語教育におけるユニバーサルデザインの現状とニーズ」のプログラムは大変充実したもので、個人的にもとても刺激を受けた大会でした。それを受けての今回、どのようなテーマ・プログラムにすればLETらしく、魅力的な大会にできるのか、頭を抱えながらのスタートでした。ところが、いざ大会事務局を中心とする実行委員の先生方とブレインストーミングを始めると、次から次へとアイデアが上げられました。その中で、言語を取り巻く科学技術が凄まじい勢いで進化・発展しているいま、「最先端の研究はどのようなテーマに取り組んでいるのか、第一線の先生方のお話を聞かせていただこう」ということになり、「外国語教育の周辺技術と今後の可能性」というテーマが設定されました。

大会のメインプログラムが技術的なトピックが多くなるので、初日のワークショップは教育・研究にかかわる身近で重要だけれども一人ではなかなか手をつけにくいものを、と考えました。研究関連では竹内理先生・湯浅麻里子先生に「ベイズ統計超入門」、藤田卓郎先生に「タスクのマイクロ評価から考える実践研究」、教育関連では松井孝志先生に「Handwritingとしての英語の文字指導のありかた」、藤永史尚先生に「教材テキストの「精読」で組み立てる英語授業」、久保岳夫先生に「英文音読における、イントネーションの基本的選択肢」、木村修平先生・近藤雪絵先生に「探究時代の語学教育—電語研が見据える新たな4技能とは—」をお願いいたしました。それぞれ多数の方にご参加いただき、大変好評をいただきました。講師の先生方にはあらためて深く御礼申し上げます。ただ、参加者の方々からは、「別室のものも聴講したかった」とのお声を多くいただき、これは今回に限ったことではないのですが、課題が残りました。

2日目、3日目には32件の研究発表・実践報告がありました。LETは元々機器関連を得意とする会員の方が多いたとは思いますが、コロナ禍での皆様のご経験もあり、オンラインにも関わらず大変スムーズにご発表・議論いただき、運営側としては大変助かりました。内容についても基礎研究から、メディアを活用した授業実践まで多岐にわたっており、これも本学会ならではの良さだなとあらためて感じました。2日目の締めくくりはTom Gally先生による基調講演「激変する世界と英語教育」でした。グローバル化の停滞、さまざまなインタラクションのオンライン化などによる英語・英語教育の役割の変化について、身近なバズワードなどとの関連からわかりやすく、刺激的にお話いただきました。3日目は谷口忠大先生による基調講演「記号創発ロボティクスとマルチモーダル感覚情報に基づく言語獲得～実世界人工知能に学ぶ言葉の意味の構成的理解～」から始まりました。ロボットがいかに記号としての言語を習得し、活用するかというお話は自然言語を主な研究対象とする私達には馴染みが薄いだけに新鮮で、大変勉強になりました。そして最後のシンポジウムは大会テーマでもある「外国語教育の周辺技術と今後の可能性」

と題し、機械翻訳分野から山田優先生、自動採点から近藤悠介・石井雄隆先生、VR から矢野浩二郎先生にご登壇いただきました。それぞれの分野から最先端のお話をいただき、谷口忠大先生にまとめていただくという贅沢な内容で、質疑時間が足りなくなるほど議論が盛り上がりました。

運営面では至らない点も多く反省点も多く、とにかくご登壇者・発表者の皆様に助けられた大会でした。しかしながら、驚くべきスピードで言語を取り巻くテクノロジーが進化するなかで、最先端の技術をどのように用いて外国語を運用するのか、外国語教育はどうあるべきなのかが問われるなかで、最先端の技術について情報を共有できたのはとても意義があったのではないかと感じています。とここまで書いたところで、「ChatGOT に本稿を書いてもらえばよかったのでは?」と気づいてしまったのでこのあたりで本稿を閉じたいと思います。2023 年度の LET62 で皆様のお目にかかれるのを楽しみにしています。

第 61 回（2022 年度）全国研究大会報告

外国語教育メディア学会・第 61 回全国研究大会は 2022 年 8 月 9 日から 11 日まで、オンラインにて開催されました。

概要：

開催日	2022 年 8 月 9 日（火）－11 日（木）
会場	オンライン
参加者数	299 名（登録者数） ワークショップ 延べ 252 人
発表件数	全体シンポジウム 1 件 基調講演 2 件 ワークショップ 6 件 研究発表・実践報告 32 件
主催	外国語教育メディア学会（LET）
会長	森田 彰
大会会長	名部井 敏代
後援	文部科学省
実施内容	下記の通り

8 月 9 日（火）－11 日（木）

オンライン形式

基調講演 1：

「激変する世界と英語教育」

トム ガリー（東京大学大学院総合文化研究科）

基調講演 2：

「記号創発ロボティクスとマルチモーダル感覚情報に基づく言語獲得～実世界人工知能に学ぶ言葉の意味の構成的理解～」

谷口 忠大（立命館大学情報理工学部）

全体シンポジウム

『外国語教育の周辺技術と今後の可能性』

トピック 1：機械翻訳

山田 優（立教大学）

トピック 2：自動採点

近藤 悠介（早稲田大学）・石井 雄隆（千葉大学・理化学研究所）

トピック 3：VR

矢野 浩二郎（大阪工業大学）

研究発表・実践報告

8月9日(火): 第1日

ワークショップ

A室

WS-1

ベイズ統計超入門 Bayesian Statistics: A Primer

竹内 理 (関西大学)

湯浅麻里子 (関西大学大学院)

本WSでは、ベイズ統計について、初心者でも理解しやすく、竹内先生・湯浅先生にご説明いただいた。

前半は竹内先生により、ベイズ統計の基本的な原理、有意差検定 p 値が抱える問題点、頻度論統計とベイズ統計との違いなどについてご説明いただいた。後半は、参加者が実際にデータを用いて JASP (Jeffreys's Amazing Statistics Program) を使用しながら、湯浅先生にベイズ統計の分析手順についてお教えいただいた。JASP は、無償の高性能統計解析ソフトウェアであり、頻度論統計・ベイズ統計の両方ができる。

WS の中で竹内先生は、実際に使用していくなかで理解を深めていくことが必要であるということ、また、統計分析を行う際には「なぜ」ベイズ統計・頻度論統計を使用し分析を行う必要があるのか、その理由を明らかにした上で分析を行うことが重要であると述べられ、ベイズ統計への理解が深まっただけではなく、自身で分析方法を判断し正しい結果を導き出す重要性を強く感じた WS であった。

【報告：濱田 真由 (神戸大学)】

WS-2

教材テキストの「精読」で組み立てる英語授業

藤永 史尚 (近畿大学)

本ワークショップは、リーディング指導を行う

上で、教科書の英文の内容を深く理解するために、テキスト全部の内容や言語的側面を、多面的・多角的に把握するにはどうするか、について扱ったものである。リーディング指導の前・中・後のそれぞれについて、何をどう行うかを概説された。プレには語彙を確認し、内容をプレビュー、読解ではスキミング、発問を通しての内容理解、言語形式に注目した確認、ポストでは内容理解を確認する方法としてサマリーライティング (あるいはリテリング) が紹介された。今回は藤永先生がご準備された教科書の一部を、順を追って説明して下さった。その様子が、藤永先生が教材研究の様子を read aloud しているようで、ほんの 2 パラグラフを料理するのに、内容から言語形式への注意点や指導ポイントの置き方をどうするか、具体的な目線や思考の流れを参加者は追体験でき、大変勉強になったワークショップであった。

【報告：大和 知史 (神戸大学)】

WS-3

探究時代の語学教育—電話研が見据える新たな 4 技能とは—

木村 修平 (立命館大学)

近藤 雪絵 (立命館大学)

LET 関西支部電子語学教材開発研究部会 (電話研) が担当した本ワークショップでは、大学入学までに探求型学習を経験してきた学生に対して、語学学習もバージョンアップが求められているとの問題意識から、発表者の勤務校で実践されている PEP (Project-based English Program) というプログラムの紹介やそこから見えてきた様々な知見について報告された。PEP とは BYOD 体制の下、学生が自分自身の興味・関心に基づいてプロジェクトを立ち上げ、その成果を英語アカデミックフォーマットで発表するという、ICT をフル活用した発信型英語教育事例である。今後求められる新たな 4 技能をリサーチ・オーサリング・コラ

ポレーション・アウトプットという形で整理し、利用しているツールが利用例とともに紹介された。最後はこうした探求型語学学習を進める上でのプログラムやFD、サポート体制に関する提言で締めくくられた。語学教育と探求型教育の交差点として有意義な報告であった。

【報告：山本勝巳（流通科学大学）】

B 室

WS-1

Handwriting としての英語の文字指導のあり方

松井 孝志

小学校の英語教科化に伴い「文字指導」導入の時期も早まった。文字を音声化するフォニックスはその指導法や活用法において、指導者間で情報や課題の共有が効果的になされているが、実際に筆記用具を用いた handwriting に関しては、伝統的指導技術でさえ継承困難である。松井先生は実際に教室で生徒とともに行う handwriting に焦点を当て、児童・生徒が教科書で「目にする文字・読む文字」の特徴とその意味および「実際に書く文字」への適切な指導方法と注意するポイントを、大変わかりやすく的確に示してくださった。手書きに近いフォントを例に挙げ、ascender, descender, height の比率の意味、adgq と bp のカウンター形状の意味、branching point についての説明では、フォントデザイナーのこだわりを味わうことができた瞬間でもあった。フォントのデザイン性や美しさという見方ではなく、なぜそのような形になるのか（しなければいけないのか）を知ることは、読み書きに困難を抱える児童・生徒への重要な指導にもつながることを再確認する貴重な機会となった。

【報告：今井由美子（同志社女子大学）】

WS-2

英文音読における、イントネーションの基本的選

択肢

久保 岳夫（開成学園）

英語のイントネーションの基本的な考え方と具体例(新幹線のアナウンス)について、講義形式でのワークショップであった。初めに、「英語のイントネーションとは何か」、「イントネーションの機能には、どのようなものがあげられるか」、「引用系(文脈無し)のイントネーションのポイント」、「イントネーション句の構造」について基本的な考え方の説明を受けた。概要は、以下のとおりである。

(1) イントネーションとは、声の高さ(ピッチ)の上げ下げのことである。(2) イントネーションは、抑揚によって 7 つの種類に分類される。(3) 英語のイントネーションを考える際、イントネーション句(intonation phrase :IP) という単位で考える。(4) IP の構造は、「PH (前頭部) H (頭部) N 音調核 T (尾部)」を基本とする。(5) JC Wells の 3 つの T(Tonality, Tonicity and Tones)を基準にイントネーションを分析する。

のぞみのアナウンスの具体例の説明は、一つ一つの文章について、丁寧に解説を受けながら進んだ。手順は、一貫しており、(1) 発話を IP に分割する (tonality) (2) 核の位置を見つける (tonicity) (3) 頭部の開始位置 (the onset of the head) を見つける (4) リズム強勢を見つける (5) 頭部と核音調(tones)を選択する、という順番で進み、とても分かりやすい説明であった。

【報告：眞崎 克彦（神戸親和女子大学）】

WS-3

タスクのマイクロ評価から考える実践研究

藤田 卓郎（福井工業高等専門学校）

「実践研究の基本的な考え方を知ろう」と題して、実践研究とは何なのかクイズ形式の問いかけで始まり、参加者はグーグルフォームで回答した。その後で具体的な事例に基づいて実践研究の説明があった。「タスクのマイクロ評価」を実践研究の

一つとして位置づけ、マイクロ評価は個々のタスクの評価であるとした上で、3つの具体例で詳しい説明がなされた。そして「マイクロ評価をやってみよう」と題して、マイクロ評価の手順が6つのステップに分けて紹介された。さらに、マイクロ評価はタスク・活動の改善に加えて、単元やプログラムの評価にも応用できると紹介された。具体例を示して理解を促すワークショップだった。「最初から完璧である必要はなく、まずやってみて、少しずつ改善すれば良い」とのことで、「ちょっとでも良いので情報を収集してみると面白いし授業に張りが出る。教えている自分自身も楽しいのでは」との言葉が印象的だった。

【報告：山岡浩一（姫路獨協大学）】

8月10日（水）：第2日

開会行事

司会：菅井 康祐（大会事務局長、近畿大学）

挨拶：森田 彰（外国語教育メディア学会会長、
早稲田大学）

名部井 敏代（大会会長、外国語教育メディア学会関西支部長、関西大学）

口頭発表

Zoom 1

2-1

効果的で楽しい語彙学習方法を考える方略トレーニングの実践

山本 大貴（信州大学）

Good Vocabulary Learner 育成を目的としたCALLA モデルを援用した明示的語彙学習方略の実践とその効果について発表頂いた。学習者は自身に最も適した学習方略を他者との議論を通して考えた後、Quizlet を用いて学習し、その成果をグ

ループ対抗 Kahoot!大会や語彙テストで示すことが求められた。その結果、提案された学習方略は、語彙習得を向上させると共に、能動的に語彙学習に取り組む姿勢を育むことが明らかとなった。

【報告：佐藤 健（東京農工大）】

2-2

辞書検索行動の質的分析 2：英語力との関係

小山 敏子（大阪大谷大学）

語彙文法問題解答時の辞書検索行動を、電子辞書とスマートフォンアプリの利用した場合で比較し、ツールの違いが検索行動に与える影響を検証した。TOEIC part 5 の問題を英語力の異なる2人の学生にツールを用いて解答してもらい、検索行動を分析した結果、英語力の高い学生は問題の正答率及び語彙の再認率が高く、加えてツールを用いた検索頻度が高く、電子辞書を用いる場合には用例を確認していることが判明した。

【報告：佐藤 健（東京農工大）】

2-3

（発表はキャンセルされました）

2-4

Effects of Automated Feedback on Student Acquisition of Different Types of Vocabulary

Spring, Ryan (Tohoku University)

Takeda, Jessica (Tohoku University)

Google フォームのテスト機能を活用した自動フィードバックが、複数の種類の語彙の習得に与える影響について報告があった。特に接辞や語根を含んだ、概念的に教えることのできる語彙への有用性が示唆された。また、フィードバックに対する学生からの反応の紹介があった。質疑応答では、フィードバックの準備やフィードバックの利点についての議論があった。

【報告：川口 勇作（愛知学院大学）】

2-5

Argumentative Signal Words as a Potential Predictor of Human Rating

Spring, Ryan (Tohoku University)

人間の英作文評価の予測変数として、Argumentative Signal Words (ASW) を用いた指標について検討した結果が報告された。英作文の中の ASW の数に基づく各種指標と、人間の評価ならびに他の一般的な指標との相関関係から、ASW を用いた指標を予測モデルに組み込める可能性が示された。質疑応答では、指標の選択や分析手法、英作文タスクの種類などについての議論があった。

【報告：川口 勇作（愛知学院大学）】

2-6

海外メディアの動画から深める 4 技能の統合的学習レベル別・教養英語コースブックの紹介

竹内 理（関西大学）

本発表は、近日発行予定の教養英語教材の内容について紹介するものであった。各章に設けられた 4 段階構成のタスクの紹介や、教科書で扱われるトピックの紹介、実際の教材で取り上げられる映像のデモンストレーションが行われた。質疑応答では、電子版の有無や、動画の再生方法・レベル調整、難易度、理論的背景などについての質問がなされた。

【報告：川口 勇作（愛知学院大学）】

Zoom 2

2-1

メタバースを利用した外国語学習

李 相穆（九州大学）

本発表では、現在注目されているメタバースの外国語学習への応用と有効性が主張された。現在主流となっているリアルタイム会議システムを介したオンライン授業ではグループ活動等を行うこ

とが容易ではなく、同じ空間を共有しているという感覚が欠如する。メタバースを利用することでこのような限界点を打破できる可能性が示唆された。

【報告：今野 勝幸（龍谷大学）】

2-2

Teaching in the Metaverse: A Preliminary Study on Educators' Perspectives

Wilson Nicholas J. (AtoZ)

Alizadeh Mehrasa (The International Professional University of Technology in Osaka)

In this study, 25 teachers from different contexts responded to a questionnaire asking about their experience of the Metaverse after joining a hands-on professional development virtual space on Gather Town. The result of the analyses showed that while the elementary school teacher had a positive attitude toward using the Metaverse, the university teachers had negative views due to their low-tech literacy and PC ownership. In addition, all teachers perceived the ease of collaborative learning and the similarity with the physical classroom. However, they emphasized the necessity of tech support.

【報告：今野 勝幸（龍谷大学）】

2-3

バーチャル空間における直接法の発展 —中国語教育を事例として—

華 金玲（慶應義塾大学）

本発表では、目標言語のみで指導される直接法を用いた中国語の授業を対象に、Gather Town を利用したオンライン授業の実践の成果が報告された。直接法による授業をリアルタイム会議システムで実現するは困難であったが、Gather Town を

用いることによってそれらが解決し、更に中国語の自習室やイベントのなど利用方法が発展的に広がった様子が報告された。

【報告：今野 勝幸（龍谷大学）】

2-4

Comparative Study of ZOOM and VR Lessons in Language Education

Obari, Hiroyuki (Aoyama Gakuin University)

本発表では、60名を対象とした45分×週2回×30週のVRによる英会話レッスンと、30週のZOOMによる反転学習が、それぞれ、英語のスピーキング（やりとり）の能力や異文化コミュニケーション能力の向上に有効である調査結果を示した。また、VRによるレッスンではアバターを使うことにより、不安感が軽減される効果が確認された。

【報告：本沢 彩（関東学院大学）】

2-5

同期型オンライン国際協働型学習(COIL)の実践—二週連続の米国に大学との交流

安西 弥生（青山学院大学）

本発表では、オンライン同時双方向型の国際協働型学習であるCOILを、二週間にわたり米国二大学と実施した結果が報告された。この学習では日米の学生がそれぞれの学習言語で発表を行った。学習の結果、プレゼンテーションに関する学生の英語コミュニケーション能力が向上しただけでなく、異文化理解が進んだことが伺えた。

【報告：本沢 彩（関東学院大学）】

2-6

遠隔と対面ではどちらの英語授業タイプを大学生は好むのか？質問紙による学生の意識調査をもとにした調査研究

若本 夏美（同志社女子大学）

今井 由美子（同志社女子大学）

佐伯 林規江（同志社女子大学）

本発表では、英語の専攻の大学生の遠隔授業と対面授業に対する考えをアンケート調査し、4技能別の傾向を分析した結果が報告された。調査の結果、スピーキングにおいては遠隔と対面の間で能力の伸びに対する回答に差異が見られ、対面が好まれる傾向にあることを示した。そして、教師が授業形態を選択できる環境の必要性が示唆された。

【報告：本沢 彩（関東学院大学）】

Zoom 3

2-1

学習者音声に対する音素・単語を単位とした明瞭度自動予測～シャドーイングを用いた評価者の聞き淀みの計測とモデル化～

峯松 信明（東京大学）

中西 のりこ（神戸学院大学）

シャドーイングにおける評価者の聞き淀みを計測し学習者音声の区間を検出する手法を提案し、日本人大学生270名を対象に実証研究を行い、学習者音声の明瞭度を自動予測する技術を構築した発表であった。シャドーイングが崩れた理由（音素なのかシラブルなのか等）の解明が必要、World Englishesへの対応、将来AIを使用した研究としての展望等のコメントがあった。

【報告：高橋 美由紀（愛知教育大学 名誉教授）】

2-2

シャドーイングと音声認識アプリを用いた可視化が日本人大学生の発音の理解のしやすさに与える影響

新本 庄悟（京都産業大学）

シャドーイングによる発音に対する研究として、日本人大学生22名を対象に、学習者レベルに関わらず客観的かつ正確に発音に対するフィードバック

クを行える音声認識アプリを活用した指導とその効果について分析した発表であった。学習者自らが可視化して評価できることにより、発音が上達したと感じ、リスニング力の向上に繋がったという結果が得られた。

【報告：高橋 美由紀（愛知教育大学 名誉教授）】

2-3

シャドーイング練習の位置づけの違いが英語学習者発話のモデル音声への近さに与える影響

山内 豊（創価大学）

峯松 信明（東京大学）

西川 恵（東海大学）

シャドーイングを認知的処理の観点から捉え直し、シャドーイング練習の位置づけを変えることによって、学習者発話をどれだけモデル音声に近づけることができるのかを、日本人大学生 60 名を対象にリピーティングや音読などの一連の英語音声練習の前後でのシャドーイング練習の比較から、音声練習前にシャドーイングをした方が効果的であったことを明らかにした。音韻表象や教科書の英文について等の提案やコメントがあった。

【報告：高橋 美由紀（愛知教育大学 名誉教授）】

2-4

TOEIC® 公式 e ラーニング 基礎編 Listening & Reading の開発と学習効果

湯舟 英一（東洋大学）

保住 美貴（一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会）

谷向 桂子（一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会）

英語学習初中級者に特化した e ラーニング教材の要望に応える形で開発に着手。TOEIC L&R の受験準備だけでなく、初中級者が英語力全般の基礎固めができる教材とした。トレーニングには「チャンク」ごとに意味内容をイメージしたタスクを

採り入れた。大学で 3 ヶ月間授業の中心的トレーニング教材として導入した結果、学習時間に比例して TOEIC L&R の平均スコアが上昇したと報告がされた。

【報告：松原 緑（名古屋大学）】

2-5

サブスクリプション・サービスを用いた英語授業の可能性—Disney+のザ・シンプソンズを教材にして—

木村 修平（立命館大学）

発表者は「ザ・シンプソンズ」を教材に、各回 1 つのエピソードを取り上げ、小テストを LMS 上で事前に実施し、授業内で解説するという形式の授業を実施した。アメリカ文化に根ざしているジョークを理解することは難しいと感じながらも、受講生の大半が高い学習意欲を維持できていた。著作権の問題さえクリアになれば、多言語の字幕と音声を選択できる配信コンテンツに独自の小テストなどを組み合わせることで、新たな語学教材の可能性が示唆された。

【報告：松原 緑（名古屋大学）】

2-6

Laying the Foundation in a STEM Department: A Proposed Framework for English Presentations

Kawano, Madoka (Meiji University)

Elwood, James (Meiji University)

Fukuchi, Kentaro (Meiji University)

発表者の STEM 学部では、学生が国際会議に参加する機会があるため、会議に備えるフレームワークを構築することを模索。機械翻訳も利用しクリプトを完成させ、英語による事前練習を重ね準備をしたが、アカデミックなプレゼンテーションで STEM 分野の学生が直面する困難さは、特に臨機応変さを求められる Q&A セッションで顕著

であった。これら得られた知見をフレームワークに組み入れ、更に研究を継続することが報告された。

【報告：松原 緑（名古屋大学）】

Zoom 4

2-1

全国学力・学習状況調査の出題英文における文法項目の出現頻度：中学校学習指導要領「文、文構造及び文法事項」を視座に

高橋 昌由（大阪成蹊大学）

現行中学校学習指導要領の「文、文構造及び文法事項」が、「全国学力・学習状況調査」において、各文法項目の出現頻度を調査し、特徴的な事例を指摘して、日々の授業実践での文法項目の指導において重視することが可能な視点等を考究した。本研究の成果は、授業実践においてそれぞれの文法事項を扱う際に活用が期待される。

【報告：淡路 佳昌（大東文化大学）】

2-2

オンライン授業による明示的文法指導の英語動詞習得における効果

奥田 阿子（長崎大学）

隈上 麻衣（長崎大学）

オンライン授業における明示的文法指導の効果を検証するために、日本語を母語とする英語学習者の大学生を対象に、自動詞・他動詞の指導をオンデマンド型のオンライン授業で実施し、対面型の授業における指導と比較した。その結果、授業形態は明示的文法指導の効果に影響を及ぼさないことが確認された。

【報告：淡路 佳昌（大東文化大学）】

2-3

機械翻訳を援用した和文生成の学びに関する調査

辻 香代（大阪公立大学）

岡本 吉世（大阪公立大学）

機械翻訳(machine translation: MT)援用の和文生成を通じて、英語学習者はどのような学びを得ることができるのかを明らかにするために、日本人の英語中級学習者の上位群を対象に、MT を援用して自分で書いた日本語レポートの英訳課題を課した。その結果、MT が翻訳した英文を第三者的視点から分析することで、情報がより正確に伝わる原文が完成され、MT 訳文だけでなく自作英文の品質も向上した。

【報告：淡路 佳昌（大東文化大学）】

2-4

英語母音表記の多様性

河内山真理（関西国際大学）、

有本純（関西国際大学）

日本の学習英和辞典、発音辞典、英英辞典と合わせて、検定教科書等の発音表記を調査した結果、表記が多様であること、カナ表記ルールが複雑化し不統一であることが指摘された。文科省指導要領の重点項目ではないものの、義務教育期間で基本的なつづりと発音を短時間の帯学習として導入し、発音表記の基礎を学んでおくことで、中高での辞書指導につなげることができ、結果として英語の正しい音声理解ができることが提案された。

【報告：田上 優子（福岡女子大学）】

2-5

自治体独自の外国語教育カリキュラム政策：構造改革特区を事例として

酒井秀翔（東京大学大学院）

2003～2008年に全国の自治体から国へ提出された「構造改革特別区域研究開発学校制度」の申請書に基づき、81件の外国語カリキュラムの実態を分析調査した。公立学校における必修科目としての外国語教育の開始学年や授業時数には自治体間で著しいばらつきが実際には生じていた。また、

国際理解教育を「総合的な学習時間」に組み込み、小学校 3～6 年で実践導入している例が多い中で、情報教育、郷土学習等と合わせ、自治体の特異性を生かして「中国語」を導入する複数県の例が紹介され、必ずしも制度が規格化されてはいないという実態も明らかになった。

【報告：田上 優子（福岡女子大学）】

2-6

英語ライティング授業における協調学習

青木 千加子（北海学園大学）

非英語専攻の大学生 36 名におこなった「英語ライティング授業」を活用しておこなった協調学習について、個人レベルの認知と共に、学習者がグループをどうとらえているかのグループ認知について自由記述質問用紙によるアンケートを基に、調査をおこなった。小グループでのアイデア共有から話し合いを通して対話による気づきが促進され、新しい発見や英語への理解を深めていったことがわかった。グループで質の高い成果を生むような努力をすることで、仲間と共に作業することによる有効性を示す「共同効用」感も高められた。

【報告：田上 優子（福岡女子大学）】

基調講演 1

激変する世界と英語教育

トム ガリー（東京大学大学院総合文化研究科）

バズワードに主導される政策は多くあり、それ自体は必ずしも悪いものであるとは限らないが、複雑かつ急速に変化する世界においては新たな問題の元ともなる。英語教育におけるバズワードの 1 つである「グローバル化」にしても、1990 年代以降実際的に人・物・情報の移動が活発化して、それに対応する英語教育の実践が求められるという意味において、中身のあるバズワードであったが、

2020 年代の今現在は政治的・民族的要因、及び感染症への対応などからグローバル化が停滞している時代とも捉えられ、グローバル化を前提にしてきた日本の英語教育もそのことを認識する必要がある。対面からオンラインへのシフト、特定の場所と言語使用との結びつきの弱化、さらに AI の言語運用の可能性など変化の激しい世界の中で、古いバズワードや前提にとらわれることなく、活発に議論・実施することの重要性を説かれた。質疑応答では学習者視点でのバズワードポリシーや、AI ではできなくて人間でなくてはできないことについての議論がなされた。

【報告：橋本 健一（大阪教育大学）】

8 月 11 日（木）：第 3 日

基調講演 2

記号創発ロボティクスとマルチモーダル感覚情報に基づく言語獲得 ～実世界人工知能に学ぶ言葉の意味の構成的理解～

谷口 忠大（立命館大学 情報理工学部 教授）

講演者オリジナルの記号創発ロボティクスは、実世界の感覚運動情報に基づき様々な認知機能を統合し、適応し、実世界経験に基づいて発達的に学習し、概念や語彙を獲得するものとされる。そうした特徴を体系として抽象化したものとして創発的記号システムを設定すると、言語利用はまさに創発的記号システムの一例ととらえることができる。ここで改めて AI 関連の研究において言語とロボティクスの研究が、言語学と人工知能にとって重要なフロンティアとなることが指摘された。その上で言語とロボティクスという 2 つの領域における創発的記号システムにおける実世界とのやり取りはまさに語学学習に近似しているのではないかと、言語は言語だけの刺激に基づいて学ぶので

はなく、記号の意味は身体と環境の相互作用と社会的な相互作用の双方に依存して創発するものであるといった興味深い指摘に満ちた刺激的な講演であった。

【報告：山本 勝巳（流通科学大学）】

口頭発表

Zoom 1

2-1

Chatbot Usability for Conversation Practice in EFL Classroom

Kovalyova, Angelina (Tsukuba University)

This presentation investigated the capabilities and limitations of chatbots for English conversation practice in EFL context. There are two major types of chatbots. The first type is the rule based, decision tree chatbots. Another type is the AI chatbots which utilize NLP and machine learning. To test the chatbots, the research participants were asked to watch a video to study some vocabulary. After watching the video, they used chatbots for 15 minutes. They also completed Chatbot Usability Questionnaire (Holmes et al, 2019) before and after the treatment. The results of the questionnaire showed that Replika was reported with highest increase in confidence and self-assessed English proficiency, while Koddy scored lowest in regards to "understanding of human input". This was due to the fact that Koddy fixes too much grammar during the chat which loses the natural flow of the conversation. The research showed some limitations and traits of modern chatbots. The listeners actively participated in Q and A session.

【鬼頭 和也（城西大学）】

2-2

The Role of Explicit Knowledge and Cognitive Styles in L2 General Proficiency

Satori, Miki (Nagoya University of Foreign Studies)

In this study, the author investigated the role of explicit knowledge and cognitive styles in L2 general proficiency. The participants of the research were first and second-year university students with CEFR A2 to B2 range. These participants took five types of tests, Group Embedded Test (Itoi, 1990), The Timed Grammaticality Judgement Test, GJT (R. Ellis, 2009), and The Untimed Grammaticality Judgement Test, The Metalinguistic Knowledge Test, and L2 Proficiency Test (computer adaptive TOEIC test). The results from the t-test showed that in the timed GJT, the participants' access to explicit knowledge was affected due to the time pressure when they processed ungrammatical sentences rather than the grammatical ones. The author concludes that grammatical and ungrammatical sentences in the GJTs are distinct from explicit knowledge. Moreover, they operate differently with L2 language proficiency. In the Q and A session, the author answered some questions by revealing future research plans.

【鬼頭 和也（城西大学）】

Zoom 2

2-1

専門性が高まる薬学部のオンライン留学プログラムにおける教員のオンライン引率の実践

近藤 雪絵（立命館大学）

立命館大学薬学部が行っていた留学医療トレーニング・プログラムを、留学ができない COVID-19

影響下にオンラインで行った際の実践報告であった。トロント小児病院のセッションで行う講義と立命館大学のセッションで行う症例ディスカッション・異文化交流を、Zoom や Slack を使った教員からのフィードバックや即時サポートというオンライン引率で支えながら実施した実践内容が、事後アンケート結果とともに紹介された。

【下山 幸成 (東洋学園大学)】

2-2

通常授業における COIL の実践方法、および国際協働学習による日本人学習者の学びに関する考察と示唆

布施 邦子 (大阪公立大学)

ウォレストッド 千鶴子 (大阪公立大学)

発表者が 2021 年度に米国マリアン大学と実施した国際協働学習を同期・非同期を組み合わせた COIL 型授業で行った際の実践報告だった。双方の担当教員とコーディネーターが授業準備として行った取り組み、COIL 型授業の実践方法、学生の振り返りやレポートや事後アンケート調査結果を使って確認できた 4 つの気づきや変化が紹介され、COIL 型授業実践の展望が示された。

【下山 幸成 (東洋学園大学)】

Zoom 3

2-1

Japanese University Students' Change in English Learning Motivation Over Four Years

Kobayashi, Chiho (Tenri University)

本発表は、日本人大学生英語学習者 44 名がどのように英語学習を継続するのかについて、これまでの動機づけ研究で十分に着目されてこなかった persistence に焦点を当てた研究である。2022 年 4 月の大学入学時から、4 年間を通して調査する質・量の混合型、縦断的研究のフェーズ 1 および 2 の研究結果が報告され、今後の報告が期待され

る。

【柴田 里実 (常葉大学)】

2-2

日本語版 L2 Grit 尺度の改訂および質問紙調査：英語力との関係から

山中 由香 (近畿大学 非常勤講師)

古屋 あい子 (東洋大学)

本発表は、日本人大学生 233 名を対象とし、「興味の一貫性」と「努力の粘り強さ」から構成される Grit (やり抜く力) と英語力との関係を明らかにしている。データ収集には、発表者らが 2021 年に作成した日本語版 L2 Grit 尺度の改訂版を使用し、調査の結果、「興味の一貫性」のみが英語力に対して有意な影響を示すことが報告された。

【柴田 里実 (常葉大学)】

Zoom 4

2-1

プランニングとトピック・タイプが、日本人英語学習者のオンライン実験におけるスピーキング・パフォーマンスに与える影響について

広瀬 八重子 (名古屋大学 大学院生)

本研究は、1 分間の発話前プランニングとトピック・タイプの英語発話への影響について分析し、スピーキング・パフォーマンス向上のための示唆を呈することを目的とした。オンライン実験で、発話前に 1 分間プランニングを行う場合や、個人的な経験について説明する場合に、流ちょうさ (発話語数) や正確さにおいて、スピーキング・パフォーマンスが向上する傾向が示された。

【古村 由美子 (名古屋外国語大学)】

2-2

小中接続をめざした「話すこと [発表]」における児童の姿 —教科書を発展させた協働学習による英語パフォーマンス課題の取組から—

森本 敦子 (高野山大学)

黒川 愛子 (帝塚山大学)

本研究の目的は、「話すこと [発表]」の活動、特に Show and Tell 活動への接続を意識して取り組んだ小学校段階での協働学習が児童のパフォーマンスと情緒面にいかなる影響を及ぼすかを調べることであった。質問紙の回答結果、参加者は本取組を「とても面白い・面白い」「とてもやりたい・やりたい」と回答したが、約 5 割の参加者は「とても難しい・難しい」と回答し、本取組を負荷が高いと捉えていた。

【古村 由美子 (名古屋外国語大学)】

シンポジウム

外国語教育の周辺技術と今後の可能性

トピック 1: 機械翻訳 山田 優 (立教大学)

トピック 2: 自動採点 近藤 悠介 (早稲田大学)、石井 雄隆 (千葉大学・理化学研究所)

トピック 3: VR 矢野 浩二郎 (大阪工業大学)

ラップアップ: 谷口 忠大 (立命館大学)

学際的で先見性のある本シンポジウムでは、まず、外国語教育の周辺技術に関して 3 つのトピックについて専門家からの報告があった。

(1) 機械翻訳 (山田優先生): 機械翻訳のアプローチの変遷や現状・機械翻訳のプロセスやリテラシー等についての解説の後、外国語教育への活用について、事例や課題などの具体例を交えながら方向・提案があった。

(2) 自動採点 (近藤悠介先生、石井雄隆先生): 前半では、実用化されている自動採点の例や発話自動採点タスクの進化についての解説に続いて、英語教育関連の自動採点研究や関心が少ないこと等を含む問題提起がなされた。後半では、技術の進歩と説明可能性が逆比例する現象を指摘したうえで、社会的要請に適った「説明可能な AI」が教育応用においても重要で有望な視点であることに

ついて言及され、今後の方向性について検討された。

(3) VR (矢野浩二郎先生): 近年の技術の発達によって可能となった VR (仮想現実) の外国と教育への応用について、登壇者がアバターで登場して解説した。学習者がバーチャル空間に没入して体験的な学習を行う「文具」としての使い方のみならず、教員が VR 空間において教材を作成・提示する「教具」としての使い方が豊富な実践例やデモンストレーションとともに紹介され、課題や長期的展望について議論された。

続いて、谷口忠大先生による各発表の概評の後、ブレイクアウトセッションを通じて登壇者との議論や交流の機会が持たれた。また、シンポジウム全体を通じて、オンライン学会ならではのチャットを活用した活発でシンクロナスな意見交換や情報共有がなされた。

【報告: 金澤 佑 (関西学院大学)】

閉会行事

司会: 菅井 康祐 (大会実行委員長、近畿大学)

挨拶: 下山 幸成 (外国語教育メディア学会関東支部長、東洋学園大学)

関西支部長、近畿大学)

2021年度 本部 事業報告

1. 開催行事関連

第60回全国研究大会

ライブ配信：2021年8月20日（金）～22日（日）

オンデマンド配信：2021年8月13日（金）～29日（日）

2. 総会

開催日：2021年9月3日（金）

開催場所：Web会議システム

3. 出版・広報関係

1) 全国ホームページを利用した広報

2) 全国メーリングリストを利用した広報

3) LETblogの発行（毎月1回発行）

4) Newsletter No. 100の発行（Web上で2022年3月12日（土）公開）

4. 運営業務関連

1) 支部長連絡会の開催：2021年8月30日（月） Web会議システム

2) 理事会の開催：2021年8月30日（月） Web会議システム

3) 会長・副会長会議の開催：2022年1月23日（日） Web会議システム

5. 学会機関誌

Language Education & Technology 第58号 2021年8月 J-STAGEで公開

6. 学会賞

1) 論文賞

受賞者：山本大貴（信州大学）、近藤 暁子（兵庫教育大学）、

鳴海 智之（兵庫教育大学）、多田 ウェンディ（兵庫教育大学）、

吉田 達弘（兵庫教育大学）

対象業績：日本の高等学校での活用を想定したペア型スピーキングテストの開発

7. その他

1) 賛助会員に対するバナー広告の無料開放（11社）

2) ホームページへの賛助会員動画掲載企画（賛助会員プレゼンテーション）（10社）

以上。

2022年月8日2日

自2021年4月1日～至2022年3月31日

項目	予算額	決算額	内 訳
前年度繰越金	1,531,817	1,531,817	
賛助会費	1,250,000	1,350,000	50,000円 × 27件 (内1社2年分)
一般会費	1,164,000	1,164,000	前年度各支部会費収入 × 0.18
雑収入	0	13	銀行利子
収益計 (①)	2,414,000	2,514,013	
法人化準備積立金	92,400	92,400	
収入計 (③)	2,506,400	2,606,413	

費 目	予算額	決算額	内 訳
印刷費	359,700	359,700	機関誌58号
通信費	50,000	12,900	切手代等
ネットワーク関係費	700,000	547,800	本部サーバー管理・業務委託料・ドメイン維持料など
旅費交通費	250,000	0	
会議費	25,000	0	
全国研究大会開催費	900,000	726,000	全国研究大会ホームページ作成(アセット)
国際交流委員会費	20,000	0	
雑給	0	0	
事務用品費	50,000	19,717	封筒、朱肉、カッターマット、印鑑、表彰状作成、賞状額等
支払手数料	8,000	1,932	
雑費	50,000	6,765	慶弔費
費用計 (②)	2,412,700	1,674,814	
法人化準備積立金	92,400	92,400	
支出計 (④)	2,505,100	1,767,214	

当期利益			
【収益(①)－費用(②)】	1,300	839,199	
次年度繰越金			
【前年度繰越金＋当期利益】	1,533,117	2,371,016	

当期収支			
【収入(③)－支出(④)】		839,199	

以上、報告します。

外国語教育メディア学会本部事務局

事務局長 千葉 敦



以上、相違ありません。

2022年8月2日

会計監査

奥山 慶洋



会計監査

森 好紳



2022年度 本部 事業計画

1. 開催行事関連

第61回全国研究大会

ライブ配信：2022年8月9日（火）～11日（木）

2. 総会

開催日：2022年9月

開催場所：Web会議システム

3. 出版・広報関係

1) 全国ホームページを利用した広報

2) 全国メーリングリストを利用した広報

3) LETblogの発行（毎月1回発行）

4) Newsletter No. 101の発行（Web上で2023年3月公開）

4. 運營業務関連

1) 支部長連絡会の開催：2022年8月27日（土） Web会議システム

2) 理事会の開催：2022年8月27日（土） Web会議システム

3) 会長・副会長会議の開催：2023年1月下旬 Web会議システム

5. 学会機関誌

1) Language Education & Technology 第59号 2022年8月 J-STAGE で公開

2) Language Education & Technology 第60号

・投稿申し込み締切：2022年8月31日（水）

・応募論文提出締切：2022年11月30日（水）

・応募論文結果通知：2022年3月

7. 学会賞

2022年度学会賞選考委員会における受賞候補者の決定：2022年4月～6月

2022年度学会賞選考結果の報告：2022年8月

2022年度学会賞候補者推薦締切：2022年3月末日

8. その他

1) 賛助会員に対するバナー広告の無料開放（8/27現在10社）

2) ホームページへの賛助会員動画掲載企画（賛助会員プレゼンテーション）

以上。

2022 年度 外国語教育メディア学会本部 予算案

2022 年 8 月 27 日

2021 年 4 月 1 日～2022 年 3 月 31 日

項 目	予 算 額	内 訳
賛助会費	1,150,000	賛助会費 @50,000 × 23 件
一般会費	1,199,000	前年度各支部会費収 入 × 0.18
雑収入	0	
収益 計 (①)	2,349,000	
繰越金 (②)	2,371,016	
法人化準備積立金 (③)	92,400	
収益 計 (①+②+③=④)	4,720,016	

費 目	決 算 額	内 訳
印刷費	377,300	機関誌 59 号(データ編集費 ¥268,000、J-STAGE 登録 ¥45,000、抜刷作成 ¥30,000)
通信費	50,000	切手、レターパックなど
ネットワーク関係費	700,000	本部サーバー管理費・業務委託費、ドメイン維持料・受付フォーム 作成費・受付処理業務費など
旅費交通費	250,000	会長副会長会議旅費などの公務出張の交通費補助
会議費	25,000	会長副会長会議他
全国研究大会開催費	500,000	全国研究大会参加申し込み機能修正等
事務費・業務委託費等	500,000	Scopus 登録に関わる業務委託費
国際交流委員会費	20,000	
雑給	0	
事務用品費	50,000	文具・用紙・トナー・学会賞賞状作成費など
支払手数料	8,000	振込手数料
雑費	50,000	
費用 計 (④)	2,530,300	
次期繰越 (⑤)	2,097,316	
法人化準備積立金 (⑥)	92,400	
費用 計 (④+⑤+⑥)	4,720,016	

NEWSLETTER No. 101

発行日 2023年3月31日

発行所 外国語教育メディア学会 (LET)

会長 森田 彰